

『古巢物語』注釈

日本語日本文学科 古代文学研究室

中井 賢一・小野 優子・井芹友美佳

片山 理恵・久留須倫子・津々見 彩

村野 実咲・吉田 法光・古川 瑞紀

本稿は、『古巢物語』に語注を施し、通釈を試みたものである。『古巢物語』の本文は、故築瀬一雄氏御所蔵にかかる『碧冲洞叢書』所収本（『碧冲洞叢書』第二巻（臨川書店））に基づく。

氏の解説によると、当該写本は、半紙判十一丁半、表紙に本文と同筆で直書の外題があるが、内題、奥書、刊記、蔵印などはなく、近世中期頃のものと思しい。本文は、一丁の片面に九行、字詰は一行二十字前後、歌は改行一字下げで歌末が本文に続く体である。本文とは別筆で訂正等の書き入れがある。また、第七丁と第八丁の間に欠脱部分がある（本稿においては74行目と75行目の間に該当する）。

不明の伝来に加え、作品内容としても、氏が「物語の構想としても、何等すぐれた所はなく」と断じられるとおり、いわゆる有名「古典」作品と比肩すると、見劣りの感否めない。この物語が、未だ活字化されることも衆目を集め

ることもなかつたゆえんであらうと思われる。

しかし、一方で、例えば、物語後半、窮地の主人公の救済に奔走する「大御母」や、それに感応した主人公の変容など、〈慈愛〉〈親子愛〉とも言うべきモチーフが、我々読み手の心を確かに揺さぶることも、また事実であらう。氏は「要するところ、平安朝物語の最も悪しき模倣作品である」とまとめられたが、その評言が的を射ているにせよ、それでも、人間関係の希薄化が言われる現代において、この物語を読み味わう価値は、一定存すると思う次第である。

なお、本稿は、古代文学研究室において実施した平成26年度共同研究の報告書としてもある。主として学生たちが、限られた時間の中、各自の個人研究と並行して地道に作業を進めた成果である。調査や考察が不十分な箇所も多々あらうと思われるが、御教示、御叱正を請いたい。

〔凡例〕

- ・【本文】及び【解釈】の行頭には、対応する行番号を付した。
- ・右傍の振り仮名や訂正等の書き入れは、底本どおりとした。但し、底本に存在する、訂正箇所を示す本文左傍の「と」印は省略した。
- ・後に【語釈】を掲げたものについては、本文中の対応箇所に（漢数字）を付した。
- ・本文欠脱部分は、底本どおり「脱文アルカ」と記した。

【本文】

- 1 いづれの御時にか有けん、世中すきものにくらし給ふ皇子おはしましけり。近う仕まつる天離夷アマサカルヒナ
- 2 麻呂マロ(二)といふ有けり。こゝろきはめてねぢけたりけるが、常に御かたはらに居て、御けしきをうか
- 3 ゝひぬたり。いかにすゝめ奉りけん、あらぬあやしの高殿タカトノ(二)に物しいぎなひ奉りけり。皇子はさす
- 4 がにいかなる所とも思ひえ給はず、むねいとつづれたる御さまにて、
- 5 うき世をばみ山にのみとのがるらんかゝる朝は人のしらずや
- 6 と思ひつゝけて、たゞあきれにあきれ給ふ。そが高殿のあるじは、年としは十の上七つやつもこえた
- 7 らんと思しきが、いとうつくしききぬども着よそひて、あたりにありとし有調度チウトまで、いたらぬ
- 8 隈なく、きよらなること、いふ斗なし(三)。華ハナがめ(四)にをみなへしのつくり花をなんさしたりける枝に、かゝるうたをむすびつけたり。
- 9
- 10 夕されば身はあだし野の女郎花枕さだめぬ秋風ぞふく(五)
- 11 たがすさびなるらん、ゆかしくぞおぼし給ふ。かのでてなるをとめの名をなん薄雲ウスクモとはいひける。
- 12 年よりはおよすげたる女のわらは、こゝろぎきたよる(六)をみな(七)に、ものなどおほするに、みない皇子の
- 13 御うへをなにくれといたはり奉るが、中にも薄雲はいとうれしげに、わきてかいぐしくつかへ
- 14 奉るさま、はじめて逢奉るけしきにも見へず(八)なんある。されど、みこはこゝろづき給はぬをうら
- 15 みて、うたよみて奉ける。

16 我はしもながめなれにし月影のなどよそげにもて
らすなるらん(九)

17 といへりけれど、とかくにみわはおほし出し玉はねば、
うす雲はそのかみ(一〇)ありしことどもなど言

18 出給は給は(一一)せたりし白銀(一二)をもてつくり
たる御薬入(一三)などどうで、かくてもやなどゑ
んじに怨じつ

19 又なん

20 わがなしと君を思はでなかくにわすれざりつる
身をぞうらむる

21 今は思ひ出たまひて、御返し

22 わすれ艸(一四)しもがれはてて今よりは忍ぐさ
(一五)をぞあはれとは見る(一六)

23 そのかみをおぼし出されては、猶あはれさのそひた
る御さまなり。ひなまろなどは、かゝる御な

24 かとはしらがれば、おもひしよりもこゝろのゆきは
てゝ、ひなまろ

25 ことの葉のくさはひ(一七)をしもせざりしにしら
ずはなみもならんとすらん

26 といひて、ひそかによるこびて、酒のみあへりてし
てうどなどねぶり居り。めのわらはをもよび

27 さまし、おのがじゝとりいれて、みなねたるらん、
いまはうす雲とたゞふたりとはなりたまひた

28 り。つくり花につけたりしうたをいまさらおもひ
つゞけ給ひて、

29 をりとれど人もとがめずをみなへしわがしめし野
(一八)の花とならん

30 との玉へりければ、御返事を、

31 もとよりも君にとなびく女郎花をりぬとてなど人
のとがめん

32

かゝりけれども、なほみこは一わり(二九)あはれと
のみ思ひて、薄雲のみそかに聞へたる事ども、せち

33

なるこゝろども定めかねたまふも御理りながら、さ
すがにくからず思したまへるにや、ね玉ひに

34

ける暁におき出給ひて、

35

こゝろをもしらでや鳥のなきそめ(三〇)し人をお
もひ(三一)のまだふかき夜に

36

とて、なごりなく(三二)かへり給ふ。うす雲は都
を旅とまうのぼり居たるぬなかうどのたびのうき

37

をわするゝ料にとて、うきて世をふるうまやち(三三)
の傀儡(三四)のたぐひにて、はた高殿はそがあそび
のむ

38

しろ也けりとは夢しらし給はであなまめの女やとの
みにて、おほかたに思ひへしたまへるにぞ有

39

ける。かくて皇子は我御殿に居玉へども、ともすれ
ば、やるかたなくぞ思ひわづらひ玉ふ。もと

40

の上(三五)は、御行方なくなり給ひ、御聞(三六)をな
ぐさめ奉る御うち人もなきをりから、八日の月(三七)
入なん

41

とするころ、過こし夢を例のおもひ出給ひて、さり
ともとみづから(三八)いましめ給へど、いとせち

42

にやおはしけむ、薄雲がり(三九)いなんと思して、
御聞近う侍りける田鶴(四〇)といへるを呼玉ひ、ゆゝしき

43

御事いできにければ、ひそかに五条(四一)のあたり
へわたり玉ふ。しかはあれど、いとしのびにしのび

44

て出玉へば、宿直(四二)の人々にも、しかぬいひそ、み
車はさら也、御かちにて、舎人(四三)一三人こゝろき

45

ゝたるかぎりを侍らせてといひこしらへてのたまふ
を、たゞならじ、わきてかゝるゆゝしき御事、

- 46 女のおのれのみおほするはと、こゝろおちぬずむね
とゞろくまでに思ひながらひたぶるにいそが
- 47 せ給ふことにしあれば、御身のてうどなどこゝのふ
るに、なにくれとこゝろしらひのさまいとま
- 48 めなるがうへ、おのづから形カタチのよかりければ、あな
がちにもとめぬはなのほひ えならぬさま
- 49 うつし心もなく、いと近う見給ひて、かれをしもえ
なんずとおぼしつき、浅からぬ御こと葉の露
- 50 かけ結ひつゝ、うす雲にもおもひかへまくおぼし、
五条のあたりにわたらんことは、ふつに思ひ
- 51 とゞまりぬと申玉ひて、猶田鶴にぞ御枕のちりはら
はせんと、こゝろしたくみこそし玉ひけれ。
- 52 田鶴はあまりのうれしさに、立もはした居るもはし
たにはぢらひたるさまにてたゆたふも、やさ
- 53 しくもまたうべ也けり。
- 54 皇子、
- 55 宿ちかくをり居る田鶴をうちつけにくも井(三三)
にたかく思ひそめてき(三四)
- 56 我にもあらで、御返しをす。
- 57 汐からき芦辺になれてゐるたづは天津アマツ雲井
にすむよしもなし(三六)
- 58 といひくで、つひにみそかに夢をぞむすび(三七)
玉ふ。さて、朝アサタに宿直のつかさに男おうな共に近う
- 59 侍るまじきよしおほせて、ひたぶるに田鶴をいつく
しみ給ふ。かくて、ことこゝろもおはせざり
- 60 しに、いかゞおぼし出しけん、うす雲にいひしらひ
給へりしこと思ひつゝけて、又さらにあはれ

61 に思ひ給ふ。もとよりも大幣オホヒナ(三八)のさがになん
ましましける。皇子、

62 身をわけてとふよしもがなあだしの(三九)にさくを
みなへし(四〇)まどのいとほぎ(四一)

63 とふたしへにものおもひ給ひて、いたづらにあかし
くらし玉ふ。かゝる御こゝろをば、うす雲は

64 えもしらで、ふつに御おとづれもなかりければ、久
かた(四二)の月をながめて、雲井をこひ、あまと

65 ぶや(四三)鴈カの翅ツバサ(四四)をうらやみても、かひ有べ
くもあらで、

66 うらみつゝともにながめしやまの端ぞいまはかた
みの有明の月

67 など思ひくして、つひにやまひのどこにふして、外
のつとめもなくく(四五)たれこめてぞいたりける

68 が、今は世にあるべくも覚へず、からうじて皇子の
もとへかくまうさせける。

69 袖上の泪の露はさながらに我身えきくなばあはれと
も見よ

70 これを見たまひて、いとゞあはれがりて、思ひこら
し(四六)給ふをりしもあれ、皇子の御上みかみゆくりなき(四七)

71 御事こそ出来にけれ。御せうと(四八)の君と御中たゞ
ならざり(四九)けるが、皇子のいろほふみたまへるに
より、

72 家のたから(五〇)どもの費(五一)大かたならず(五二)、
おほやけの御おぼえけしきばみぬとて、かの君たち
の御はか

73 らひ(五三)にて、物をもいはせ奉らで、皇子をばし
ろし(五四)たまへる大和国(五五)高市郡(五六)なる山
里におろしこめた

- 74 まひてけり。皇子はあるにもあらで、「脱文アルカ」
- 75 なき御手よりかくおそろしきものゝ手にはいかなる
御斗(五七)にて傳へたまひけん、よも殿はしらし玉
- 76 はじとこそいひあへれ。かゝるなげきのうちにも、
皇子の御たより(五八)いかで見まほしきかまほしと、
- 77 神に佛にいのれども、さらにいづこにわたらせ給ふ
とだにきゝえで、
- 78 世になしといふたよりだにきかまほしさればうき
身もしぬるばかりぞ
- 79 となんいひて、あだごゝろ(五九)もつかで、玉緒(六〇)
のとく(六一)たへよかしとのみおもひ居ける。されど、
かく
- 80 てはこゝろざし(六一)も見えじとや思ひつらん、や
みにまぎれ、登良のあきと(六三)の山里をしのび出
野に
- 81 山にわかちなくにげにくて、都ちかくしるよしが
り(六四)来て、ひたかくれにかくれすみて、都の
- 82 皇子のさゝめごと(六五)を、こゝろよせ(六六)にな
ん聞居たりける。皇子はやうやく人ごゝろつき(六七)
て、過こし
- 83 かたを思ひ出て、又さらにならひ給ふ。田鶴のう
へはた薄雲をしも、かゝる御身ながらゆかし
- 84 とのみおもひ玉ふ。
- 85 世の秋に、われあひぬればたのめつる人のこゝろ
の華もちるらん
- 86 と、おもひ給ふといとほし。今は外トにだに出玉はで、
都のそらをのみあほぎて、時のいたるをぞま
- 87 ちくらし玉ふ。ひとりあはれとおぼす大御母オホミハハのあり
ければ、御許(六八)にふかき罪にもあらず、ながく

88

かくてあらんはおほやけの御聞へもいかゞなるべければとて、深き御はからひをねぎ(六九)きこへ玉ふ御

89

文のおくに、

90

山里におほくのなげきこりつめ(七〇)ばみやこにかへる道をわけてよ

91

御かへり事をと見給ふに、一首のうたなん有ける。

92

子をおもふゆみ(七一)にまよひて山ふかく思ひいりつゝたどる(七二)と(七三)をしれ

93

皇子これを見玉ひて、ありがたの御心やと、又なみだぐみたまふもうつ(七四)たける(七五)。さて三十日斗も

94

経へて、皇子にはしらせ給はで、御殿にはもはらかへり給ふまうけなさしめ給ひて、いろこのませ

95

給へれば、あてなる(七五)女をえらびて、かしづかせ(七六)奉るこそよかめれとて、えらびてこれをも
居置玉

96

ふ。さてなん御むかひの御車を遣はしける。皇子はけふばかりとは夢にもおもひ出させ給はねば、

97

余りのうれしさに先なみだのみさきだて玉ふ。

98

かなしきにそぼつなみだとおぼへしをうれしきにしもなどかおつらん

99

とよみて、出玉ふ。山里のわびずまひも今はと出玉ふには、さすがに御余波ナコロの見えくさせ給ふも、

100

あはれにもやさしかりけり。御はからせ給ひしごとくかへり給ひてよりは、ふつに外にも出給は

101

で、かの居置玉スエキへる女(七七)にすみ給ひて、こよなきものためでいつくしみ玉ふ。女もまたまめにつか

102

うまつりけり。此女そのかみ此御殿に宮づかへし居たりて、田鶴とよばれたりしが、程ホトも経へにけ

103

るがうへ、いとみめ立まさりて、みやびかにもなりて、名をさへ雲井とよばれにしかば、ふたゝ

- 104 びつかへ奉るとはしるひとたえてなかりけり。皇子の田鶴ならではとおぼし居玉ふを、大御母の
- 105 はかり知玉ひて、外ほかのあだごゝろをおさふるとて、かくはからひ玉へるにか、御心のみそかは皇
- 106 子だにしらせ玉はぬ也けり。さればぞかねて女をしもすゑ置侍給ひぬると、山里より出給ふ道に
- 107 て聞給ひ、田鶴とそのかみちかひ置玉ひし事などおもひつゞけ、都にかへりにしかば、いかでか
- 108 れがゆき方むさし野(七八)のかぎりまでも求さがさせばやと思ひ居玉ふ御こゝろにむかへて、むねつづ
- 109 れこうじ給ひしが、のちになん御こゝろゆきはて、よろこびあへり給ふ也ける。田羈も都ちかう
- 110 かくれすみ居けるに、御内人(七九)のきたりて、うちつけにみやづかへすべしとおほするにつきて、ま
- 111 うのぼり居て、皇子のかへり玉ふをまち居たるになん有る。子を思ひ給ふ御なさけ有がたくも
- 112 たふとかりけり。さて雲井にもうらなくはかり給ひて、薄雲をいかにもいたはり玉はん御こゝ
- 113 ろざしなにいできにける。薄雲とくらべては、雲井の方あはれと見玉ふ御こゝろざしふかくも見
- 114 えさせ給ふ。げにやたえにたれど、かたみにあだ心もつかで、ふかき御こゝろざしはなし得玉ひ
- 115 たる。

【解釈】

1 どの帝の御代であったらうか、この世で色好みとして名をはせた皇子がいらっしやうた。その皇子に近く仕え申し上げる天離夷

2 麻呂という者がいた。心がたいそうひねくれていた天離夷麻呂が、常に皇子のお傍にいて、皇子の御様子

3 うかがっていた。そこでどのようになすめ申し上げたのだらうか、思いもよらないかがわしい高樓に皇子をご案内申し上げた。皇子は

4 そうはいつでもやはりどのような所ともお分かりなされず、胸をたいそうお痛めになつたご様子で、

5 「つらいこの世から『御山のようなこの高樓でだけは忘れられる』と逃れているのだらうか。このような朝を人々は知らないのだなあ」

6 と思ひ續けて、ただ途方に暮れに暮れなかつた。その高樓の主と思われるのは、年は十の上に七つも八

つも超えて

7 いるだらうと思われる人物で、たいそう可愛らしい衣などを着飾つて、周囲にあらゆる調度品まで、行き届かない

8 ものは無く、気品があつて美しいことは、言葉では言い尽くせない。花瓶に女郎花の造花をさしてあるその枝に、

9 このような歌が結び付けてあつた。

10 「夜になると、我が身はあだし野の女郎花のように、仮初めの女となる。私のもとにいと決めず、飽きて男が去つていくよ」

11 誰の気まぐれであるのだらう、皇子は知りたいたいと思ひなかつた。その気位が高い娘の名は薄雲と言つた。

12 本来の年よりは大人びた風な様子の子どものは、気の利いた老婆に、皇子が何か指示すると、皆皇子の

13 御身をあれこれと氣遣い申し上げるが、中でも薄雲はたいそう嬉しそうに、とりわけ健氣にお仕え

14 申し上げる様子は、皇子に初めてお逢い申し上げる様子にも本当に見えない。そうではあるけれど、薄雲は、皇子が、薄雲が誰かお気づきにならないのを不満に

15 思つて、歌を詠んで差し上げた。

16 「私はほんとうに、ぼんやりと物思いに耽ることに慣れてしまった。月の光がよそよそしく私を照らすように、どうして月の光のようなあなたは私によそよそしくなさっているのだろうか」

17 と言つたけれども、とにかく皇子はお思い出しなさらないので、うす雲はその昔あつたことなどを言い出して、皇子がお与えになつた銀で作つた御薬入れなどを取り出して、これでも思い出しませんか、な

19 再び詠んだ。

20 「私の名前を思い出してとあなたのことを思わな

21 いでかえつて忘れてしまわなかつた我が身をうらむことよ」

22 今度は思い出しなさつて、お返し

23 「忘れ草は霜にうたれて枯れ果てました。今からは忍草のようなあなたを愛しいと見ましよう」

24 その昔のことを皇子は思い出されては、さらに愛情が増したご様子である。夷麻呂などはこのような御仲だつたとは

25 とは知らないのです、思っていたよりも心が満足しくして、夷麻呂

26 「ことばの種を必ずしもまかなかつたけれども、知らないうちに花は咲き実も生っているのだらうよ」

27 といつて、こつそり喜んで、みんなで酒を飲みあつていた酒道具などをずっと舐めていた。召使の童女までも呼んで

27

目を覚まさせて、夷麻呂は夷麻呂で自分の寢所に引き入れて、みんな寝てしまっていたのだろう、皇子は今は薄雲とただ二人となりなされた。

28

例の造花につけていた歌を今になって思い続けな
さって、

29

「折ってしまったても人もとがめないよ。女郎花のよ
うなあなたに私のしめし野の花のように私のもの
なあってほしい」

30

とおっしゃったので、お返事を、

31

「以前よりも君にとなびく女郎花のような私を手
折ったからといってどうして人がとがめるだろ
うか。いや、とがめないだろう」

32

こんな風であつたが、やはり皇子は少し愛おしいと
だけ思つて、薄雲がこっそりと申し上げたことや、
一途

33

である情愛などについて本当かはかりかねなさるの
も道理であるが、そうはいつでもやはり憎からず思

いなされたのであろうか、共寝をしなされた

34

暁に起き出しなされた、

35

「あなたへの愛情の火がまだ強く深い夜に、私の
心を知らずに、夜明けを告げる鳥が鳴き始めたので
しょうか」

36

とおっしゃって、名残り深さに泣く泣くお帰りな
された。薄雲は、都を旅の目的地として参りのぼっ
ている田舎人が旅のつらさ

37

を忘れるよすがの、情けないまま世を送る駅路の傀
儡師のようなものであるが、しかし高殿はその遊興
のための場所

38

であつたとは、皇子はまったくお知りにならないで、
「ああ真面目な女であるなあ」とだけ、大方思い過
ごしなされたので

39

あつた。このようにして皇子は御自分の御殿に留ま
りなされたが、ややもすると、どうしようもなくあれ
これ悩みなされた。もと

40

の妻は、行方がわからなくなりなかり、御閨を慰め申し上げる官女もいままさにその時、八日のまさに月の入り方

41

頃に、薄雲と過ごした夢のような一夜をいつものように思い出しなかつて、「そうであつても（いくら薄雲に自分の気持ち揺らいだとしても）会うのは良くない」と我が身自らを戒めなざるが、たいそう思い詰めて

42

いらつしやつたのだろうか、薄雲のもとに行こうとお思いになつて、御閨に近くお仕えしていた田鶴という女をお呼びになり、不吉な

43

事が起こつてしまつたので、と、こつそり五条の辺りへお渡りになる。そうではあるが、まったく人に気づかれないようにこつそり

44

出発なざつたと、「宿直の人々にも言つてはならない、車は言うまでもなく出さず、徒歩で、舍人二、三人で

45

気の利いた者たちだけをお側に控えさせよ」と取り

繕つておつしやつたのを、田鶴は「とりわけこのよ

うな不吉な事を女の私だけにおつしやるのは、

46

ただごとではあるまい」と、落ち着かず胸がどきどきするほどに思ったけれど、皇子がひたすらご仕度を

47

なさることであつたので、皇子の身の回りの調度などを整えるのに田鶴が、あれこれと心配りする様子がたいそう

48

誠実であるに加え、もともと容姿が美しかったので、むやみには誘わない花のように香り立つ魅力や並一通りでない様子で

49

浮ついた心もないので、皇子はたいそう近くでご覧になつて、この女を自分のものにしてしまおうと思ひになるにつけ、深い言葉

50

をかけなざりながら、薄雲への恋心を田鶴に懸け換えたいとお思ひになつて、「五条のあたりに行くことは、すっかり思ひ

51

とどまつてしまつた」と申し上げなかつて、やはり

田鶴に闇の世話をさせようと心だくみしなされた。

52 田鶴はあまりの嬉しきで、立っているのも座っているのも落ち着かないほど恥ずかしがっている様子のためらうが、(その様子も) 慎ましく、

53 また、当然のことであるよ。

54 皇子が、

55 「宿近くに降りてきた田鶴のような女に、突然、空へと高く昇るように想い初めてしまったよ」

56 とお詠みになった歌に、我も忘れてお返事をする。

57 「塩辛い芦辺に慣れている田鶴のような女は遠く離れた天上に住むはずありません」

58 と、言い交わして、ついにひそかにもに夜をお過ごしになる。そうして、宿直の役人に男も女も誰も

59 伺候してはならないとの旨を命じて、ひたすらに田鶴を寵愛なさる。こうして、浮気心もおありになら

なかつた

60 のに、どのようにお思い出しになったのだろうか、薄雲と語り交わしなされたことを思い続けて、またさらに愛おしく

61 お思いになる。元から浮気で気が多い性質でいらっしやる。皇子は、

62 「この身を二つに分けて訪ねる手段があればなあ。あだし野に咲く女郎花のような女と籬の糸萩のような女を」

63 と二重にもお思いなさって、何をするとでもなく、一日をお過ごしになる。このような御心を薄雲は

64 少しも知ることができず、全く(皇子の) 訪れもなかつたので、月を眺めて、皇子のいる、はるか離れた宮中を思い慕い、空を飛ぶ

65 雁の翼を羨んでもかいはあるはずもなく、

66 「あなたを恨みながらも、共に眺めた山の端だっ

たのに、今は過ぎ去ったあなたを思い出させる有明の月がかかっているよ」

などと塞ぎ込んで、ついに病気になって寝込み、外で仕事をすることもなく、帳の中にもついていた

が、今は生きた心地もせず、やっと皇子のもとへこのように申し上げなさる。

「袖の上の涙の露のような私の命が終わってしまったならば私の身をあわれに思ってください」

皇子はこれをご覧になって、ますます気の毒がって、思いつめていたちようにその時によりにもよって、皇子のご身上に思いがけない

事が起こってしまったのだった。ご兄弟の君とのお仲がいわくありげであったが、皇子が色好みなさるせいで、

家の財産の消費が一通りでなく、それについて帝のお考えに怒りの様子が見えたといつて、かの兄君たちのご計画で、

何も皇子に申し上げなさらずに、皇子を帝がお治めなさっている大和高市郡にある山里に下らせ閉じ込めなさって

しまった。皇子は正気を失って、「脱文アルカ」

ないお手からこのようなおそろしいものの手にはどのような手段で伝えなさったのだろう、まさか殿は知り

なさらないのではと言い合っただった。薄雲はどのように嘆く間にも皇子のお手紙をどうにかして見たい聞きたいと、

神に仏に祈るけれども、皇子がさらにどこかへ移動なさったとすらも聞くことができず、

「皇子がこの世にないと言われるたよりだけでも良いのでどうにかしてたよりを聞きたいものだ。そうすればこの辛く当てのない身は死を迎えるばかりなのに」

と詠んで、浮ついた気持ちにもならず、命よ早く絶

えてしまえばばかり思っていた。しかし、

薄雲はこれでは皇子のお気持ちもわからないだろう
と思っただろうか、闇にまぎれ、「登良のあきと」
の山里をこっそりと出て、野も

山も区別なく逃げて逃げ、都近くの縁のある所に
来て、ひたすらに隠れ住み、都の

皇子のうわさ話に心を寄せて聞いていたのだった。
皇子はようやく落ち着いて、昔の

ことを思い出して、(重々こりたので) またこの上
昔慣れた色好みにふけることがあるうか、いやもう
ない。ただ田霧はもちろんまた薄雲については、こ
のような御身ではあるものの愛しい

とばかり思いなさる。

「私がこの世の秋のような人生の憂き目に遭遇し
たので、私が頼りにさせた人の心の華も散ったこと
だろう」

86

とお思になるのもふびんだ。今は外にさえお出に
ならず、都の方の空ばかりを見上げて、都に帰る
時がやってくるのを待ち

87

暮らしなさる。ひとり気の毒だとお思になる御母
上がいたので、その御母上の御許に「深い罪でもな
く、ながく

88

このように私を流しているのは、帝への世間からの
評判も悪くなるだろうから」と言つて、情けの深い
取り計らいを皇子がお願い申し上げなさる

89

お手紙を送った、その手紙の終わりに、

「山里に多くの投げ木を切りためるように、嘆き
が積み重なるので、都に帰る道を開いてください」

91

(と、歌を書いた。) (皇子が御母上からの) お返事
をとご覧になると、一首の歌が有ったのだった。

92

「母親が子を思う闇に迷つて、山深くに入るよう
に、深く思いながらあなたを捜し求めている道があ
ることを知りなさい」

93

皇子は、これをご覧になって、めったにないお心だなあと、また涙ぐみなさるのももつともなことであつた。さて、三十日ほども

94

経つて、御母上は皇子にはお知らせにならずに、お邸ではもっぱらお帰りになる準備をさせなさつて、皇子は色好みで

95

いらつしやるので、高貴な女性を選んで、世話をさせ申し上げることこそ良いであらうと思つて、選んでこのような女性をも住まわせておき

96

なさる。そうして迎えにお車をおやりになつた。皇子は、今日だとは夢にも思いつきにならないので、あまりの嬉しさに、まず涙を先にこぼしなさるばかりである。

98

「悲しきで流れる涙と思われていたのが、嬉しさであつても何故落ちるのでしょうか」

99

と詠んでご出立になる。山里のわびしい住まいも今となつてはもうお別れだ、とお出になると、そうは

いつてもさすがに名残惜しくお見えになるのも

100

しみじみとたえがたかつた。御母上のご計画になつたとおりにお帰りになつてからは、皇子は少しも外へもお出にならずに、

101

御母上がお邸におきなさつていた女性のところへお通いなさつて、この上ないものとかわいがり寵愛なさる。女もまた誠実にお仕え

102

申し上げた。この女は過去にこの御殿に宮仕えをしていて、田鶴と呼ばれていたが、時間も過ぎてしまった

103

そのうえに、昔よりとても容姿が美しくなつて、上品で優雅にもなつて、名前までも雲井と呼ばれてしまつていたので、

104

再度この御殿に御仕え申し上げるとは全く考える人はいなかつた。皇子が田鶴でなくてはいけないとお考へになつていなさるので、御母上が

105

ご推察なさつて、その他の浮気心を押しとどめようとしてこのように取り計らいなさつたのであろう

か、秘めた御心の内は皇子

にさえお知らせなさらなかったのだ。そのようであるから御母上が皇子のためにあらかじめ女をちよūd待たせ申し上げなされた、皇子が山里からおいでになる道中で

お聞きになり、女が待っていることと田鶴と昔約束しなされた事などを考え続け、都に帰ってきてしまったので、どうにかして

田鶴の行方を武蔵野の果てまでも捜し求めさせたいとお思い続けなされる御心と御母上が女を待たせていることを比べ合わせて、不安で

お困りになっていたが、後に真相を知ってすべて合点し今の雲井とともに喜び合いなされたのであった。田鶴もまた都の近くに

隠れて住んでいたが帝の使いがやって来て、突然に宮仕えしなさいと言いつけなされるのに付いて、

参内していて、皇子がお帰りになる時を待ち続けて

いたのであった。母が子をお思いになる人情はめつたにないことで

尊いのであった。そして雲井にも隠すことなく相談なさって、薄雲をどのようなかたちでも大切にお世話なさろうとする御意向が

でてきた。しかし薄雲と比べて、雲井のほうが優れているとお思いの御心が深いとも

見えるようにしなされる。本当に離れてしまった期間もあつたけれど、互いに浮気な心ももたないで、深い愛情を育むことができなされた

いたのだろうか。

【語釈】

(一) 天離夷麻呂

|| ここでは人名となっている。もともと「天離」は空遠く離れるの意で枕詞。かかる「夷」は田舎の意。

(二) 高殿

|| 高く作った建物。高樓。ここでは、女の集った遊び場、ととる。

(三) いふ斗なし

|| 言葉で言い尽くせない。言いようがない。言い表せない。

(四) 華がめ

|| 花を生ける、壺形や筒形をした容器。

(五) 夕されば

|| 「あだし野」は死人を葬る地、移ろいやすいものたえ。「をみなへし」は秋の七草の一つ。歌では多く女性にたとえられる。「秋風」は「飽き」との掛詞となっている。「あだし野の風になびく女女郎花われしめ結はむ道遠くとも」

(『源氏物語』手習卷) が引歌か。

(六) こゝろぎゝたる

|| 気が利いている様子。

(七) をみな

|| 老女。おむな。おうな。

(八) はじめて逢奉るけしきにも見へず

|| この薄雲の様子や直後の歌から、薄雲と皇子は初対面ではないことが分かる。

(九) 我はしも

|| 「月影」はここでは、皇子のご寵愛のことを示す。

(一〇) そのかみ

|| これ以前に薄雲と皇子は関係を持ったことがあると推測される。

(一一) 給は給は

|| 衍字か。

(一二) 白銀

|| 銀をいう。

(一三) 薬入

|| 薬を入れる容器。薬入に具体的にどのような薬を入れていたのかは不明だが、「棗は練薬入と心得たるはあまりつたなし」(『好色敗毒散』) や「半俗の膏薬入ハ懐に」(『嵯峨日記』) という用例がある。

(一四) わすれ艸

|| 植物「かんぞう(萱草)」の異名。身につけると憂さを忘れると考えられていた。

(一五) 忍ぐさ

①植物「しのぶ(忍)」の異名。

②植物「のきしのぶ(軒忍)」の異名。

③「わすれぐさ(忘草)」の別称。

④思い慕う原因となるもの。心ひかれる思いのたね。(小学館『日本国語大辞典』)

(一六) わすれ艸

①「忘草かれもやするとつれもなき人の心にしもはおかなむ」(『古今集』恋歌五・八〇一・宗于朝臣)や、「忘れ草生ふる野辺とは見るらめどこは忍ぶなり後もたのまむ」(『伊勢物語』一〇〇段など)をふまえた歌か。

(一七) くさはひ

①物事の原因。もと。材料。種。

(一八) しめし野

①自分の領地であることを示すしをつけた野。

(一九) 一わり

①十分の一。転じてばくぜんとある程度をいう(小学館『日本国語大辞典』)。ここでは「少し」、「ちよつと」という意か。

(二〇) なぎぞめ

①掛詞。染めと初め。

(二一) おもひ

①掛詞。思ひと火。

(二二) なごりなくく

①「名残なく」と「泣く泣く」を掛けるか。

(二三) うまや

①令制で、諸道に三十里ごとに置かれた宿駅で、継立て用の人馬を常備し、宿泊・食料補給の求めに応じた施設。当代にはすでに衰えて、それに代って宿が発達したが、和歌や連歌などには「うまやのをさ」などの形で用いられた(三省堂『時代別国語大辞典』)。

(二四) うまやぢ

①「駅(うまや)」のある街道、また、その宿場。

(二五) 傀儡

①中古・中世、東海以西の各地を漂泊して歩いた芸人。漢語の傀儡子(くわいらいし)を古くから「くぐつ」に当てているが、近世にはもっぱら音読して「くわいらいし」と呼ぶ。本来、農耕・養蚕などに従事せぬ、したがって定住生活を営まぬ集団で、男は弓馬狩獵を事とし、木偶(でく)を舞わせたり、幻術・曲芸の類を演じたりした。女は唱歌音曲をよくし、また、売春もした。同時に独自の信仰を持ち、百神(百太夫)を祭った。

男の芸能、女の売春は本来その祭事の一つであった。〈中略〉「くぐつ」はしだいに海道の宿駅に定着するようになり、鏡宿・青墓・赤坂などがその居所として知られた（角川書店『角川古語大辞典』）。

①人形の一種。歌などに合わせて踊らせるあやつり人形。

②「くぐつまわし（傀儡回）」の略。（『中古、あやつり人形を回して見せ、またそのかたわら、曲芸や奇術なども演じてまわった一種の漂民。女は売春もしたという。のち、寺社の近くに定住して、寺社の布教の用をつとめるようになった。』）

③（くぐつまわしの女たちが今様などを歌い、売春もしたところから）舞妓や遊女。（小学館『日本国語大辞典』）

(二五) 上

|| 高貴な人の妻。

(二六) 閨

|| 寝室。寢所。寢間。

(二七) 八日の月

|| 引歌等が想定されるところであるが不明。

(二八) みづづから

|| 「みづから（自ら）」に同じ。

「みづから」が慣用的に使われて、元來「み」は身の意であるという意識が薄くなって、さらに「み（身）」が添えられて成立した語と考えられるが、「み」を尊敬を表わす接頭語と意識して用いたこともあった（小学館『日本国語大辞典』）。

(二九) がり

|| 「が―あり」または「か（処）―あり」の變化した語）代名詞または人を表わす名詞に付き、その人の許に、その人の所に、の意を表わす。格助詞「に」や「へ」を伴わないで、移動の意を含む動詞に直接続く。（小学館『日本国語大辞典』）

(三〇) 五条

|| 京都府（山城国）京都市中央部を東西に貫く大路。またその通り一帯。五条大路という。東大路から天神川に到るところ。条坊制では、五条大路は現在の松原通りに相当し、往時は互五条大路の鴨川には牛若丸と弁慶の物語で名高い五条大橋が架かっていた。現在の五条大橋は、一五八九年（天正一七）豊臣秀吉が伏見との交

通を重視して架橋し旧名をあてたもの（遊子館
『日本文学地名大辞典』）。

(三二) 宿直

|| 宮中などで宿泊して勤務し、警護などに当たること。

(三三) 舍人

|| 天皇や皇族に仕え、雑事をつかさどる下級役人。

(三三) くも井（雲井）

|| ①雲のあるところ。空。

②雲。

③はるか離れた所。

④（庶民から遠く離れた所の意から）皇居。宮中。

⑤皇居のあるところ。都。

(三四) 宿ちかく

|| 本歌が「雲井」の名前の由来となっているか。

(三五) 天津

|| 天に関する事物を冠する語。天界の。天の。空にある。

(三六) 汐からき

|| 「雲井」の名前の由来となっているか。

(三七) 夢をぞむすび

|| 夢を見る。眠る。

(三八) 大幣

|| ①大きな串につけた「ぬさ」。祓えの時に使い、

祓えが終わると、人々が、これで体をなでて身のけがれを移し、川へ流した。大幣は多くの人が手に引き取るので、「引く」の序として歌に詠まれることが多い。小幣の対。「おほぬさの引く手あまたになりぬれば思へどえこそ頼まざりけれ」（『古今集』恋四・七〇六・よみ人知らず）。

②（①の用例の和歌から、「引く手あまた」の意に用いる。）ひっぱりだこであること。また、浮気で気が多いこと。

(三九) あだしの

|| 京都市右京区嵯峨の奥、小倉山の麓にある地。火葬場があった地として「鳥部野」とともに有名。無常の象徴とされた。転じて、死人を葬る地。墓地。移ろいやすいものたとえにもいう。

(四〇) をみなへし

|| ①「秋の七草」の一つ。山野に自生し、夏から秋にかけて黄色い花を傘上につける。歌では、多く女性にたとえる。「秋の野になまめきたてをみなへしあなかしがまし花もひと時」（『古今集』雑体・一〇一六・僧正遍昭）。ここでは、「薄雲」を例えている。

②「襲の色目」の名。表は縦系が青、横系が黄、

裏は青色。秋に用いる。

(四一) いとはぎ

|| 糸萩。糸のように枝の細い萩(季・秋)。ここでは、「田鶴」を例える。

(四二) 久かたの

|| 枕詞。天に關係ある「天」「雨」「月」「雲」「空」「夜」「都」などにかかる。

(四三) あまとがや

|| 枕詞。空を飛ぶところから「雁」に、また、その類似音の地名「輕(かる)」、転じて「領巾(ひれ)にかかる。

(四四) あまとがや 鷹の翅

|| 「天飛ぶや雁の翼の覆ひ羽のいづく漏りてか霜の降りけむ」(『万葉集』卷十・二二三八)からの引歌か。

(四五) つとめもなくく

|| 「勤めも無く」と「泣く泣く」を掛けるか。

(四六) こらし

|| 「こらす」の連用形活用。一点に集中させる。その事だけに心を集中的に向ける。

(四七) ゆくりなき

|| 「ゆくりなし」の連体形活用。思いがけない。

だしぬけである。

(四八) せうと

|| 兄弟にあたる人。

(四九) たゞならざり

|| 「ただならず」の連用形活用。様子がいわゆるあげである。様子ありげである。

(五〇) たから

|| かね。金銭。財貨。おたから。

(五一) 費

|| ついえ。費用がかかること。金がかかること。また、そのさま。かかり。物いり。出費。

(五二) 大かたならず

|| 一通りでない。

(五三) はからひ

|| 措置。取り成し。計画。とりはからひ。

(五四) しろし

|| 「しろす」の連用形活用。お治めになる。「しろす」とも。

(五五) 大和国

|| 畿内の一國で、現在の奈良県にあたる。

(五六) 高市郡

|| 大和国(奈良県)中部の郡。北部は奈良盆地の南部を占め、南部は竜門山塊(多武峯・高取山)

から派生した低丘陵が多く、飛鳥川・高取川・曾我川は北流し、北低南高の地形（角川書店『角川日本地名大辞典』、『日本書紀』「卷第十九欽明天皇」に「遣蘇我大臣稻目宿禰等於倭国高市郡、置韓人大身狭屯倉〔言韓人者百濟也〕・高麗人小身狭屯倉」という記述有り（□内は割注）。「身狭」は高市郡の地、「屯倉」は天皇所領の蔵、あるいは直轄領のことを指す。

(五七) 斗

|| はかり。物事を解決しようとする分別。また、その方法。

(五八) たより

|| 消息を伝えるもの。音信。手紙。

(五九) あだごころ

|| 浮わついた、不実な気持。

(六〇) 玉緒

|| いのち。生命。「玉」は「魂」に通じるところから、靈魂が身から離れないようつなぎとめておく紐の意から転じていう。息の緒。

(六一) とく

|| 時間的経過が速いさま。速やかに。急いで。早速。即刻。とつく。とう。

(六二) こころざし

(六三) 登良のあきと
|| 愛し求める心。愛情。いとしいと思う心。

|| 京都近辺の山中にある地名と推測されるが詳細は不明。「登良」は「とら」と読んで、寅の方角を表すとも考えられる。「あきと」は『倭名類聚抄』に「鰓アキト」とあり、「魚頬也」とされる。魚の鰓に似た形状の土地のことか。

(六四) がり

|| 前掲、注（二九）に同じ。

(六五) ささめごと

|| ひそひそ話。内証話。ささめきごと。

(六六) こころよせ

|| 心を寄せる対象。

(六七) 人ごころつき

|| 「人ごころつき」の連用形活用。生きていこう感じがもどってくる。正気・常態にかえる。

(六八) 御許

|| 親の元。

(六九) ねぎ

|| 「ねぎ」の連用形活用。祈る。願う。

(七〇) こりつめ

|| 「こりつむ」の已然形活用。樵り積む。木を切つて積む。切りためる。

(七一) 子をおもふゆみ

|| ここでは「子を思ふ闇(やみ)」と解釈する。「人の親の心は闇にあらねども子を思ふ道にまどひぬるかな」(『後撰集』雑一・一一〇二・藤原兼輔)によるか。

(七二) たどる

|| 探り求める。尋ね探す。

(七三) と

|| 途。みち。みちすじ。

(七四) うへ

|| うべ。「むべ」とも表記する。もつともなことに。いかにも。

(七五) あてなる

|| 「あてなり」の連体形活用。高貴な。

(七六) かしづかせ

|| 「かしづく」の未然形活用+使役の助動詞「す」の連用形活用。お世話をする。

(七七) かの居置き玉へる女

|| 大御母が皇子の邸に住まわせておいた女性。雲

井(=田鶴)のこと。

(七八) むさし野

|| 東京都と埼玉県にわたる、荒川と多摩川の間の平野。また、武蔵の国全体をさすこともある。

(七九) 内人

繩文中期までは常緑広葉樹林、古代には草野原、中世以降に現在のクヌギ・ケヤキなどの人工の雑木林になった。また、古くから逃水(蜃気楼のように遠くに水が溜まっているようにみえる現象)が武蔵野の名物として知られていた。今回と共通して「探し訪ねる」場所として武蔵野が詠まれた和歌は、『後撰和歌集』などの「武蔵野は袖ひつばかりわけしかどわか紫はたづねわびにき」、『夫木和歌抄』の「武蔵野や葦をだにもたづねみん限もしらぬ色やふかきと」がある。前者の和歌は、武蔵野に生えている若い紫草を「若紫」と表現し若い女性の比喩としている。このような表現は『伊勢物語』の初段にみられるものが初出である。この物語では、「逃水のように逃げる・消える」、「若い女性の比喩となる紫草」といった、「武蔵野」に関連したイメージから用いられた慣用句的な表現として「武蔵野」が使われているのだと推察される。

|| 天皇から賜った召使の童。『栄華物語』の「輝く藤壺」には、「さるべき童などは女院などより奉らせ給へり。これはやがてこの度の童の名ども、院人、内人、宮人、殿人などのやうにつ

け集めさせ給へり。」とある（角川書店『角
川古語大辞典』）。

〈補足〉

脱文部分について

【本文】74行目と75行目とは、前後の文脈が全く繋がらず、
相応の脱文があると思われる。底本には、築瀬氏による「脱
文アルカ」との書き入れが見られ、氏は、料紙一、二枚分
の脱文を想定しておられる。

少なくとも、それら脱文部分には、主人公の皇子が兄弟
たちの画策（皇位継承権をめぐるか）により幽閉された
こと、また、薄雲が皇子の臣下クラスの人物（75行目の「殿」
に引き取られたこと、等が描かれていたと思しい。そして、
その「殿」の邸に何者か（＝「おそろしきもの」）が忍び
込み、薄雲がそれに怯えている、というのが75行目以降の
展開と推察される。